The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	古代オリエントの黄金工芸の造形と意匠
Author(s)	中西, 勝彦
Citation	デザイン理論. 1992, 31, p. 78-79
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/52992
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

分科会研究
発表要旨

古代オリエントの黄金工芸の造形と意匠

中西勝彦

今日多くの民族文化は，多様性を残しながら単一の世界文明にまとめられている。この長く複雑な統合過程は，紀元前1000年にはすでに始まっていた。ユーラシア大陸で起こったこの過程，とりわけシルクロードと呼ばれるユーラシア大陸を東西に結ぶ古代の交易路地帯の隊商都市国家群から出土された遺品や遺構に関する考古学の研究成果に顕著である。

本発表は，一連の考古学の研究成果の中にあって，ほとんど論考が及んでいない工芸品，とりわけ黄金工芸品の造形と意匠に関してまとめたものである。発表をまとめる際に用いた方法論は，故原田淑人博士が漢・六朝より唐代におよぶ画像碑，陶俑，金工その他遺物意匠に見えた装飾の変遷と胡俗，胡風の消化を論考された『東西交渉史論』，『東亜古代文化研究』に見えた東西交渉史の方法論。また故深井晋司博士の『ペルシア古美術研究ガラス器金属器』，『ペルシア古美術研究第２巻』に見えた東西美術交渉史の方法論。さらに東西文化交流古典考古美術史学と名乗り，時代のみならず地域においても広大な領域の研究を遂行されている筑波大学相馬隆教授が『流沙海西古文化論考』，『安息隊商歴程考』で用いられた碑文をはじめとする遺物に記載されている記述を解読し美術工芸品の位置づけを普遍化するという方法論を平衡して用いた。

また発表の学術的位置づけとしては，東西美術交渉史における研究の動向を概観しながら，同学術領域である古代ペルシアならび古代オリエントにて製作され発掘された遺物の研究を鑑みながら，とりわけ黄金工芸品の造形と意匠について考察した。尚，発表に際しては，具体的な論考とするため日本で開催された展覧会などにて筆者が覧古した遺物のみを用いた。

発表は，これらの地域から発掘された遺物を概観することから始めた。これにより紀元前には，すでに高度な鋳造技術が培われていたことが明確になった。そこに取り上げた遺物から，少ないながらも諸民族の複雑な相互の影響は紀元前７～４世紀に明瞭にたどることができた。それら遺物を詳細に見ると，それぞれの時期に民族相互の影響関係は，著しく拡大したことも同時に見ることができた。これらは，いずれの民族も単に受動的であったのではない。彼らにとって必要な，彼ら固有の要求に適するものだけを受け入れたのである。

歴史地理学的に見ると，この時代，お互いに親縁関係にある民族が歴史の舞台に登場してきた。オリエントにおいて世界的な国家を建設したメディア人やペルシャ人，黒海沿岸草原地帯の支配者スキタイ，中央アジアとカザフスタンの草原や砂漠に君臨したサカであった。そしてこの時期に，イラン人王朝の下にあるオリエントの古い文明と草原地帯のイラン語系住民の密接な接触が始まったのである。

ユーラシアの草原地帯では，前９～７世紀に，異なる起源を持つ多くの民族が，文化面での大変革を体験した。すなわち，遊牧生活・半遊牧生活への転換である。放牧

された家畜群の後を追って人々は常に移動するため，部族間の平和的接触と敵対的衝突が反復されるようになった。機動力に富む騎馬軍隊が数多く出現した。それを率いたのは，無数の家畜や馬を所有しそれまでにない富みと権力を得た族長たちであった。新たな経済の方法の転換で遊牧民族は，半農半牧の部族にたいして明らかに優位に立った。したがって遊牧に敵したあらゆる土地の住民は，この新しい経済方式に移行した。同時に社会体制や人々の意識も変化したのは当然のことである。黒海沿岸から内陸アジアの草原地帯にかけて，発掘された遺物，とりわけ武器や馬具に顕著に認めることができる。具体例としては，「スキタイ戦士文壺」（金，前4世紀，クリ・オバ古墳）がある。スキタイ人の姿を打ち出して表わした球形の儀式用の壺である。この壺は，古代ギリシヤ金属工芸の見事な作品である。壺にはスキタイ人の生活情景が表わされている。武器の弓に弦を張る戦士，負傷した者の足に包帯をまく者，口の治療をする者などである。スキタイ人の戦士の衣装と武器が，素晴らしい技巧で表現されている。騎馬戦士の装備が完成されると草原地帯全域にわたって，「呪術的な武装」いわゆる「スキト・シベリア動物意匠」の装飾も広く普及した。ケメネス朝イランの浮き彫り彫刻は，世界の最高傑作とされている。グリフィンと呼ばれる両端に角と翼を持ったライオンの空想上の姿は，アケメネス朝芸術の典型的な特徴を示している。

この特徴は，サカ遺物の象嵌装飾の黄金工芸品にもよく見られるものである。

今世紀最大の発見と言われている「ゴルドマン」（金，前5～3世紀，サカ・イスイック出土）がある。これは黄金の衣装をまとったサカ族族長である。この遺物により，前5～4世紀の貴族の衣装，帽子，靴，武器などが明かになった。このゴルドマンが発掘された遺跡では，4000点をこえる黄金製品が発見された。その中の約200点は「動物意匠」で装飾されていた。この出土品は，遊牧社会を形成していた古代サカが社会的，経済的に高い発達水準にあったこと，さらに遠距離のバクトリア，近距離のシベリア，アルタイと文化交流を行なっていたことを証明していた。

今回の発表では，広大なユーラシア大陸において発掘される遺物の発掘場所を遺物だけから限定するには，かなりの困難があることを明らかにした。同時に，これらの遺物は草原文化がその後も発展し，古代オリエント最後の最も広大な帝国であったアケメネス朝イランとの文化交渉が行なわれていたこと。以前に存在したオリエントの諸国とは異なり，ペルシャ帝国およびそのその直前のメディア王国は，アジアの奥深くの地から孤立してはいなかった。それぞれ王をいだいた遊牧民族サカとスキタイは時にはイランと戦い，時にはその同盟国，従属国となったりした。メディア，スキタイ，サカの衣装，武器，装飾品には当時多くの共通点があった。これは黄金工芸品の意匠にも顕著に見ることができた。

ユーラシア大陸の草原地帯を通る定期的な通商路が開通する以前に，遊牧民族の諸部族間の交流によって「草原の橋」が架けられていたのである。

なかにし・かつひこ　京都大学大学院博士課程在学
1992. 1. 18　理論分科会